

もう一つの「悩み」

昨日レポートで、「吃音の子 ありのままでいて」と締めくくった。吃音に悩まされた私であるが、だんだんと人前で話すことを気にしなくなった。7日に夢洲懇談会「記者会見」で、博覧会協会との協議を報告して、記者の質問にも答えた。今日10日9時半から、市役所で大阪市都市計画審議会があり、森之宮北地区の地区計画について「陳述」を行う。昨年9月にも、大阪市の都市計画マスタープランについて陳述し、住民投票についても見解を述べた。今日の陳述でも、「大阪府市一元化」と都市計画の制度変更についても、すこしでも触れたい。時間は5分なので、「さわり」だけになってしまうが。

幼い頃から吃音とともに、生まれつき両腕が曲がっていることにも悩んできた。これは今も変わらないが。腕が真っ直ぐに伸びないのである。運動会の練習だったと思うが、「前にならえ」で腕が曲がってしまい、壇上の先生に注意されたことが忘れられない。真っ直ぐに伸ばそうにも、伸ばせないのだ。体育の授業の鉄棒の逆上がりで、みんなの前で恥ずかしかったが、曲がった手で必死に繰り返したことも。そんなこともあり半袖を着るのが嫌であった。

高校などでクラブ活動を選ぶときも、長袖を着る種目として、ハンドボールを選んだ。高山にある岐阜県立斐太高校のときだ。先輩に叱られながら真面目に練習に励んだが、なにせ腕の力が弱く「補欠の補欠」だったが、岐阜市まで遠征に出かけたこともある。私にとってスポーツに明け暮れた高校一年生だった。いまでもハンドボールには、すこし関心がある。親父の転勤で岐阜県立郡上高校に「転校」することになり、ハンドボールとの付き合いは一年かぎりであった。

信州大学に入学してからも、クラブ選択の基準は長袖だった。腕を鍛えて太くしたいと思い、剣道部に入った。私のような初心者は珍しかった。とにかく素振りの毎日で、下宿に帰ってからも素振りを繰り返した。2ヶ月後、剣道部の外部コーチから、腕が曲がっているので、剣道は上達しないので、やめたほうが良いと「教育的指導」があった。腕を鍛えたいために入部したのだが、ほかの道を歩むことにした。前にもレポートしたように、大学の講義も面白くなく、下宿に閉じこもり、ひたすら読書に励む生活を送った。いま考えると、聴いておくべき講義もいくつかあった。でも読書生活のなかから、社会科学への興味が広がり、文学やドイツ語への関心も高まっていった。それが大学院をめざす契機にもなり、大学院入試にも力を発揮した。人生とは不思議なものだ。

吃音と違って、腕の曲がりは今でも気になることがある。長袖から半袖のシーズンに変わるとき、なんだか「勇気」がいる。病院で血圧や採血をするとき、つい腕のことを気にしてしまう。現役のころ、集団検診で血圧を測ると、いつも高くなり、測り直しになることも多かった。

昨日から、なんだか自分の「過去」を語ってきた。もうすぐ、また歳を重ねる。

(2021年9月10日)